

# 学校と教師はポートフォリオを どうとらえ活用していけばよいか

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会をはじめ、教育課程企画特別部会など数々の委員として重要な役割を担い、新学習指導要領のキーマンとされる奈須正裕先生に、ポートフォリオの本質的な理解について寄稿いただきました。



上智大学総合人間科学部  
**奈須正裕** 教授

なす・まさひろ ●1961年生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程教育心理学専攻を単位取得退学、博士(教育学)。神奈川大学助教授、国立教育研究所教育方法研究室長、立教大学教授などを経て2005年より現職。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、教育課程企画特別部会、総則・評価特別部会、幼児教育部会、中学校部会、児童生徒の学習評価に関するワーキンググループなど多くの委員を務める。主な著書に『資質・能力と学びのメカニズム』(東洋館出版社)など。

## 経験としてのカリキュラム

ポートフォリオの本来の趣旨を理解するキーワードに、「経験としてのカリキュラム」がある。

カリキュラムとは通常、教育内容の計画を指す。しかし、教師としては教えたつもりでも、さまざまな理由から生徒が学び取らないことも少なくない。あるいは、教師が意図していないこと、意図した以上のことを生徒が学び取っている場合もある。

このように、実際の学習は教える側の意図や計画を超えたところで展開されている。ならば意図や計画のいかんによらず、結果として一人ひとりの生徒が経験したものをカリキュラムと見てはどうか。カリキュラムとは

個々人の経験の総体であるとのカリキュラム観、経験としてのカリキュラムという概念がそこにある。

そもそもカリキュラムという言葉には、集団で行う、あらかじめ定められた活動のコースといった意味はなかった。履歷書を curriculum vitae というように、カリキュラムには一人ひとりが歩むべき道、あるいは既に歩んできた人生の来歴という語源がある。

本来そのような意味をもっていたカリキュラムという言葉が近代、日本では明治時代に入り、すべての国民が6歳になったら学校に通い、1年生ではひらがなを、2年生では掛け算を学ぶといった仕組みができてくる中で、国家までが関与する教育内容の計画という意味に転じ、今日に至る

ているというのが、本当のところである。近代学校は、子どもの学習権・発達権を平等に保障すべく、すべての子どもに同じことを同じタイミングで教えてきたが、それは同時に、学校が個々人の歩む道、人生の在り方をあらかじめ定めるといふ、近代における個人の発達過程への公的規定の拡大でもあった。

したがって、個々人の経験の総体というカリキュラム観は何ら特異なものではなく、むしろ本来の概念である。そして、近代学校の登場によって失われがちとなった一人ひとりの個性的な成長や、それを自らの意思と能力で切り拓いていく学びの必要性や価値を強調し、維持していくという働きが、経験としてのカリキュラム

という考え方には期待されている。

## ポートフォリオ評価の特質

ポートフォリオ評価とは、経験としてのカリキュラムの考え方に基づき、生徒と教師が協働して学習過程における個々人の多様な記録や表現を学習履歷として丁寧に保存し、教育評価の対象にするとともに、指導と評価の一体化の観点からそれを次の指導やさらなる学びの展開に生かす企てである。通常の教科等の授業でも、単元や学期、年間といったさまざまなスパンでの学びを対象に、ポートフォリオは作成され、評価や指導に活用されてきた。

伝統的な評価には、①教師のみによる評価情報の収集、②プロダクトの



みを対象とした評価、③テストなど限られた方法や情報源による評価、④テスト得点から自動的に成績が算出されるなど、評価情報の解釈可能性の狭さ、⑤そのことも含め、教師が一方的に成績を確定する、といった特質がある。

ポートフォリオ評価ではこれらを改め、①生徒が評価情報収集の主体となる、②プロダクトに加えプロセスも評価対象とする、③作品などの成果物はもとより、構想や調査のメモ、討論の記録や写真など、多様な情報源による評価、④取められた評価情報をどのように解釈し価値づけるかについて、生徒が表現する機会や教師や保護者とコミュニケーションする機会が与えられる、⑤その結果、生徒も成績の確定に関わり、納得づくで成績を定めていく、などの特質をもたせてきた。アメリカの高校では、学期末に生徒がポートフォリオに収めた多様な情報をもとに、創意工夫を凝らして自身の今学期の学びを印象深く個人的にプレゼンし、保護者と教師との三者面談を行うといった実践もなされている。

「形成的評価」にも用いられてきた。具体的には、単元や学期の途中でポートフォリオを振り返る機会を設け、進行中の学びが予定通り順調に進んでいるかを点検し、今後どのように進むべきかを幅広い視野で再検討する、あるいは自身が当初目指したものは何だったかを確認するといった具合である。これは、学びの現状をモニターし制御するとともに、なぜそのような学びとなつているのかの検討を契機に自身の在り方や求めているものを内省し、今後どのような学びを展開するのが、どのような意味で自身に価値があるかを理解し、意思決定する営みでもある。このように、ポートフォリオ評価は、従来の評価が抱え込んでいたさまざまな限界を克服する。加えて、経験としてのカリキュラムの考え方に立脚し、そもそも学ぶこと＝生きることであり、個々人のキャリア形成、すなわち自らの人生をどのように生きるか＝学ぶか、さらにその営みをどのような意味として解釈し表現するかは、個々人の意思と能力に託されるべきとの理念を、画的・受身的になりがちな学校教育において維持し、展開する強力な道具立てでもある。

学校と教師には、これを生徒が自律的・創造的に成し遂げていけるよう支援することが期待される。

### 入学者選抜におけるポートフォリオ

一方、高大接続改革に伴い注目を浴びているポートフォリオは、述べてきた一般的なポートフォリオとは若干趣きを異にしている。何より、通常の教科学習以外の、いわば特記すべき事項について、その活動と学びの意味を中心に収録する点が特徴的と言えよう。

しかし、その本来の意味合いからすれば、また入学者選抜の観点からも、教科学習をも含め、学校・家庭・地域で展開されるすべての学びを通して、生徒が自身のキャリア、自身の生き方・在り方をどのようなものとして展望し、その実現に向けて現に歩みを進めてきたか、そのトータルな姿を描き出すものである方が、「主体性」や「学びに向かう力」を判断するうえでも、適切であるし、有用でもあるのではないか。

たものとなることが不可欠である。このことを等閑視するが故に、ポートフォリオが特記事項のみを対象とせざるを得ず、それをもって「主体性」の評価とするしかないというのでは、本末転倒であり、およそ不十分であろう。百歩譲って、教科に関する資質・能力はテスト等で見るから、それ以外の領域の資質・能力の評価をポートフォリオで補完するにしても、各事項の外形的な特質、例えば生徒会長を務めたとか県大会で優勝したといったことが、自動的に特定のスコアや価値判断に直結するような運用はあつてはならない。それでは、経験としてのカリキュラムという本来の理念に逆行する。

同じ活動や事項であつても、その生徒のキャリア形成という独自の文脈における意味は異なるに違いない。むしろ、その点をこそ本人が一種の物語として豊かに、また個人的に表現することが重要である。そして、その表現の真实性と切実性を慎重に、また共感的であると同時に批判的に吟味することによって、「主体性」や「学びに向かう力」も含め、さまざまな資質・能力の適切で公正な評価が可能となるであろう。